



Title	江戸期の日吉大夫
Author(s)	宮本, 圭造
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1998, 32, p. 23-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48191
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

江戸期の日吉大夫

はじめに

宮本圭造

丹波猿楽の日吉大夫については、山路興造氏「丹波猿楽日吉大夫考」(『芸能』昭和五十三年十月号)、「翁の座」平成二年。平凡社所収)、片桐登氏「猿楽「日吉座」考」(『能楽研究』六・七・九号。昭和五十六・九号)などの諸論があつて、室町期の日吉大夫の動向がかなり明らかにされている。しかし、江戸期の日吉大夫については、右の諸論も簡単な言及にとどまつており、その演能活動の動向については、いまだ不明な点が少なくない。

室町期、丹波を本拠としつつ、京都での勸進能や神事を主要な活動の場としていた日吉大夫の演能活動は、江戸期に入つてさらに大きな広がりを見せている。すなわち、京都での活動に加えて、紀州藩や岡山藩、そして後には津輕藩のお抱え能大夫として、江戸やそれぞれの藩の国元で活躍したのみならず、伊勢や尾張でも勸進能を興行しているのである。また、「日吉といふ一流」(『隣忠見聞集』)として、独自の演出をも伝えていた日吉大夫の存在は、演出史の上からも注目され、近世能楽史に占める日吉大夫の位置は決して小さくないと思われる。

本稿は、そうした江戸期の日吉大夫の動向を明らかにしようとするものである。

「日吉空庵とその後継者——日吉松雪と日吉庄五郎——」

室町末期から江戸初期にかけて、丹波日吉座を率いた日吉大夫空庵は、戦乱の混乱期をたくましく生き延び、京洛での勸進能や神事を舞台に、華々しい演能活動を展開した。その空庵の動向については、片桐登氏前掲論文に詳細に論じられており、慶長年間に一時、観世座に吸収されていたこと、その後、観世座から離脱し、京都を拠点に再び大夫としての活動を開始していたことなどが明らかにされているが、慶長末年以降の日吉大夫の動向については、元和四・五年に京都での活動記録が五例見えるに過ぎないとされる。

元和期（一六一五―二四）の日吉大夫が、京都を舞台として、なお活発な演能活動を展開していたことは、当時の京都の公家日記などから知られる。すなわち、神龍院梵舜の日記『舜旧記』元和八年四月十九日条に「日吉大夫、今日ヨリ勸進能。於中御霊社御旅所ニテ始之由也」、元和九年四月二十三日条に「中御霊社二日吉大夫、勸進能有」とあつて、中御霊社で日吉大夫が勸進能を興行したことが見えるほか、日野資勝の日記『資勝卿記』（内閣文庫蔵）元和九年四月二十九日条に、「西ノ御庭南ノ方ニテ御能アリ。日吉大夫、式三番云々」と、大覚寺門跡で日吉大夫が演能した由が見える。さらに、醍醐寺の義演の日記『義演准后日記』（醍醐寺蔵）元和九年九月八日条に、「日吉大夫、於坂本南光坊、猿楽在也。仍申刻、漸着畢。夜明、能三番、如常、酉未刻始候」と、近江坂本の延暦寺南光坊での演能に続いて、醍醐長尾宮の神事に参動したことが見え、京都尊勝院院主『慈性日記』（東大史料編纂所謄写本による）元和九年十一月十六日条にも「妙門主ニテ灌頂祝ノ能（中略）太夫日吉」とあるなど、京都近辺の寺社にたびたび参動していたことが知られるのである。

右の記録に見える日吉大夫はすべて日吉空庵のことを指していると考えられる。というのも、『舜旧記』寛永五

年（二六二八）十月二十一日条に、「中御靈ニテ日吉大夫入道、勸進能也。予見物。高砂・景清・葵上・三輪。此分
 之通、令見物、罷歸也」と、「日吉大夫入道」が中御靈で勸進能を興行した由が見え、この「日吉大夫入道」が日吉
 空庵のことと考えられるからである（空庵の名乗りは入道に際してのものであった）。寛永五年における日吉空庵
 の健在が確認され、しかもその空庵が当時なお「日吉大夫」と呼ばれていたことが確かめられるのである。

日吉空庵は元和・寛永期を通じて、京都を舞台に、勸進能・神事能と精力的な活動を続けていたが、近江の日吉
 社の神事能にも参勤していたことが、天野文雄氏「能楽史断章」（『上田女子短期大学紀要』一八号。昭和六十年）に
 指摘されている。この論文では、江戸中期、日吉彦大夫（日吉空庵の曾孫）が近江日吉社神事能の大夫職を山門に
 願い出た折りの願書『元禄十五年（二七〇二）日吉彦大夫願書』（宮内庁書陵部蔵）が紹介され、日吉空庵が近江
 日吉社の神事能大夫を勤めていたこと、そして空庵の嗣子も日吉社への参勤を続けていたが、紀伊徳川藩・岡山池
 田藩に相續いて召し抱えられたため、日吉社への参勤が懈怠がちになつていたことなども指摘されている。その
 『元禄十五年日吉彦大夫願書』は、空庵の嗣子について次のように記している（叡山文庫にも同文の資料が所蔵さ
 れており、本稿での引用は叡山文庫本によつてゐる）。

曾祖父日吉権頭、後剃髮仕、空庵与申候。其嫡子弥右衛門・次男庄五郎与申候。（中略）弥右衛門ハ從若年、
 紀伊大納言様江被召遣候（中略）且又、右庄五郎儀茂、後二松平新太郎様ニ被召出候（中略）其以後者、庄五
 郎、名を助之進与申候。新太郎様ニ而名を改、金左衛門与申候。其以来、新太郎様御暇被下、於武州上野、
 剃髮仕、從浄屋様、名を致拝領、浄甫与申候。

右によると、日吉空庵の長男弥右衛門は紀伊大納言（紀州藩主徳川頼宣）に、次男庄五郎は松平新太郎（岡山藩主池田光政）に召し抱えられたという。空庵の長男弥右衛門が紀州藩に召し抱えられていたことは、江戸中期の紀州藩能大夫徳田隣忠の著『隣忠見聞集』にも、「太夫日吉といふ一流 日吉弥右衛門／南龍院様御入国遊ばされ召抱へらるゝ太夫」と見える。徳川頼宣（南龍院）が紀州に入国したのは元和五年（一六一九）で、日吉弥右衛門の召し抱えの時期は元和末年から寛永初年頃と考えられるが、『隣忠見聞集』によれば、その後、「罪科は知らず御国を出奔」となったという。資料が少ないためもあって、紀州藩における日吉弥右衛門の演能記録は一例も見出せず、その前後の弥右衛門の動向もほとんど明らかでないが、すでに知られているように、寛永十五年（一六三八）、常陸下館城主に仕える小嶋木工助なる武士の依頼によって、日吉弥右衛門尉将氏（松雪齋）が書いた「自筆自章」の謡本『日吉弥右衛門将氏筆集謡』が法政大学能楽研究所鴻山文庫に所蔵されている。かつて、この日吉弥右衛門（松雪齋）は日吉空庵のことかとされてきたが、天野文雄氏前掲論文に、空庵の子で紀州藩お抱えの日吉弥右衛門のこととする説が出され、その説が正しいことは、『四座先祖書』（大倉三忠氏蔵）に「紀州大納言様御大夫 日吉正説」（「正説」は「松雪」の宛字）とあることから裏付けられる。

日吉弥右衛門「自筆自章」の謡本の存在は、日吉に独自の節付を持った謡本が伝承されていたことをも物語っている。すでに片桐登氏が報告しておられるように、法政大学能楽研究所蔵の柳洞本と呼ばれる番外謡本（九十曲所収）のうちの九曲に、「日吉松雪以正本写之」との注記があり、日吉松雪の謡本が「正本」として、一定の権威をもつて享受されていたことがわかるのである。もっとも、紀州藩御暇後の彼の活動記録はきわめて少なく、承応三

年（二六五四）六月から七月にかけて、四条河原で勸進能興行をしている「日吉大夫」（『隔冥記』）が、この弥右衛門松雪のことかと推察されるに過ぎない。

一方、空庵の次男庄五郎（金左衛門）も、寛永頃、岡山池田藩に能大夫として召し抱えられながら、まもなくして御暇を仰せ付けられている。すなわち、『池田光政日記』（昭和五十八年 国書刊行会）寛永十八年十月三日条に、「日吉金左衛門、扶持放候事。此度之御祝儀ニ遅参候事、（中略）ふせい成事大ニ不届事、つねく無作法、右之段ヲ以扶持放候由」と、庄五郎（金左衛門）が無調法のため扶持を召し放された由が見える。『元禄十五年日吉彦大夫願書』によれば、日吉金左衛門はその後、上野寛永寺において剃髪したとあり、金左衛門の養子庄五郎は、寛永十一年、慈眼大師に見出され、江戸に召し連れられたというから、空庵の次男の系統は寛永期に一時京都を離れて江戸に活動の拠点を移したものと考えられる。

江戸初期、日吉空庵の後継者達はいっづいて紀州藩・岡山藩に召し抱えられる。同時に、彼らと京都の能界との繋がりには次第に稀薄になっていったと思われるが、藩お抱え役者としても、まもなくして御暇となったために、江戸前期の日吉大夫はあまり目立った活躍はしていない。資料的な偏りも考えられるが、日吉大夫の動向は、この後、貞享・元禄期になってようやく活気を帯びてくるのである。

〔日吉頼母〕

法政大学能楽研究所鴻山文庫に、貞享五年（一六八八）九月、日吉頼母なる能大夫が尾張熱田で勸進能を興行した際の番組がある。脇方・囃子方は尾張藩お抱え役者の所演で、大夫には日吉頼母とともに、丹波猿楽矢田座の大

夫と思しき矢田甚兵衛の名が見える。この日吉頼母が日吉空庵や松雪とどのような関係にあるのかは明らかでないが、頼母とともに大夫を勤めている矢田甚兵衛が丹波猿樂と考えられるから、日吉頼母も丹波日吉の能大夫であったと推察される。おそらく日吉空庵の孫にあたるのであろう。尾張藩お抱え役者の助演を得て勸進能を興行していることから、この日吉頼母が能大夫としてかなりの実力の持ち主であつたらしいことが窺えるが、事実、彼は貞享期、京都を拠点に活発な演能活動を展開している。江戸前期、停滞期にあつた丹波日吉の活動は、貞享期にいたつて再び活気を取り戻しているのである。

この日吉頼母は前名を日吉権大夫と言ひ（後述）、貞享四年刊『能之訓蒙図彙』には、京都伏見住として「日吉権大夫」の名で見え、同じく貞享年間の『京羽二重』にも「日吉権之大夫」の名が載っている。その日吉権大夫の演能活動で特筆すべきは、近江日吉社神事に参勤していることである。叡山文庫蔵の延暦寺の日記『山家要記』貞享三年六月七日に「権之大夫儀、當分能も功者之由、被聞召候之間、日吉大夫職マツ職、被仰付候」と見え、「権之大夫」すなわち日吉権大夫が日吉社神事能大夫に就任したことが知られる。

爾來、日吉権大夫は延暦寺から様々な庇護を受けることとなる。延暦寺の日記『月次記』（叡山文庫蔵）貞享四年二月十六日条によると、二十五日より始まる京都での日吉権大夫の勸進能に、延暦寺から祝儀金が下されている。すなわち、二月十六日、日吉権大夫が「口上書ノ外二七日之間之能組一紙持参」したのである。先年、日吉太夫勸進能仕候節、一山々白銀五枚遣之候。今般可任先例」と、先年の日吉大夫（空庵か）勸進能の折の先例にまかせ、白銀一枚が権大夫に遣わされているのである。さらに、『月次記』同年九月四日条によると、「今度、日吉権太夫居宅仕候二付、偏知院僧正肝煎被申候。東塔方金子五両、西塔方二両、合力有之筈二相究り、横川方も、（中略）

金子式両遣之筈ニ相究ル也」と、日吉権大夫の居宅のために、合力の金子が遣わされた由が見え、日吉権大夫に対する延暦寺の庇護が様々な点に及んでいたことを物語っている。

翌貞享五年になって、日吉権大夫は名前を頼母と改めた。その間の事情は、『月次記』貞享五年二月十五日条に、「日吉権大夫仮名之儀、同姓同名有之候間、別名ニ願之由、尤候。達高聴候処、権太夫心次第、仮名替候様ニ御申渡可有□、從御門主様被仰付ニハ及申間敷候」とあることから知られる。この同姓同名の日吉権大夫は、能役者ではなく、日吉社の祇官であった可能性もあるが、同時期にもう一人、日吉権大夫を名乗る能大夫が実在したらしい（後述）。

改名後の日吉頼母は、四月九日に京の妙法院門跡で演能し（『堯恕法親王日記』）、九月には尾張熱田で勸進能を興行、十二月には江戸に下向して日光院門主に対面し、その年の暮れを江戸で迎えている。そのため、翌元禄二年正月六日の近江日吉社神事能は、「日吉太夫在江戸故延引」（『月次記』元禄二年正月六日条）となった。日吉頼母の江戸滞在が長引いたのは、観世大夫から習事の相伝を受けるためだった。『月次記』元禄元年（貞享五年）十二月二十二日条に、「頼母儀（中略）伝授事有之度由二而、観世太夫方へ申入候由二候。乍然、早速埒明不申候間、年内罷登候儀、難成候。御神事能御延引候而、頼母罷登次第、御催可被成候」とあり、伝授が済み次第、京都に上り、神事能に参勤するはずだったことが分かるが、その後半年近く経っても頼母は上洛せず、結局、その年の日吉社神事能は中止となっているのである。そうこうするうちに、元禄二年十一月十三日、江戸東叡山から延暦寺に次のような文面の書状が届けられた（『月次記』）。

一筆令懸候。然者、日吉頼母、山王大夫ニ候故、御門主様被加御憐愍、当山衆中・下谷町・浅草町中奉加なと被仰付、能装束も結構仕立申候。於当地、能仕度之由、願申二付、公儀へも此方より申上相調、能相勤申候。其内、不埒ニ而、大分金銀を遣、能装束も質物ニ差置、町人など損金を掛、御門主様、色々御苦勞ニ思召候。拙僧共、難儀仕事候。右之躰ニ而、行跡不宜候故、急度可被仰付与思召候へ共、御宥免ニ而、山王大夫職被召放、山門・坂本・東叡山・日光、徘徊仕間敷之旨、被仰渡。則為致手形、埒明申候。坂本ニ妻子有之由候間、其旨被仰渡、何方へ成共、引承候様ニ御申付、尤ニ候。頼母儀、其元へ為登、各方右之旨、被申渡候様可仕与存候へ共、其元へ登申力も無之、其内、色々悪事も出来候様相見候故、此方ニ而早速被仰付候。頼母ニ申渡候覺書・手形書付遣之候。恐々謹言。

日光院門主の厚意を無にする不埒な行動のため、日吉頼母は日吉社から妻子ともども追放の身となり、結局、わずか四年間だけで日吉社を去ることとなる。その後の頼母の動向は定かでないが、後に再び京に戻って演能活動を再開したようで、別当代『月次記』元禄四年二月十八日条に、「頼母、京都勧進能之事」と、日吉頼母が京都で勧進能を行った由が見えるが、没年などは明らかでない。

〔日吉権大夫〕

日吉頼母が日吉社から追放された後、日吉社では特に神事能大夫を定めず、年ごとに京都の能役者を雇って神事能を行っていたが、元禄四年（一六九二）、新たに日吉権大夫なる能役者が、空席となった神事能大夫職への就任

を願ひ出ている。すなわち、『月次記』元禄四年正月二十三日条に、次のような文面の書状（行光坊より三執行代宛）が載せられている。

水戸中将殿方御内證ニ而両執当迄、慈雲院・東光院を以被仰入候ハ、御出入仕候、日吉権大夫と申者、社役之筋目も有之。能も功者にて候。年頃之者ニ候。不便ニ存者ニ候間、何とぞ成申事候ハ、彼社之太夫ニ被仰付候ハ、御満足ニ御座候。半助被仰遣候。其趣、上方へ申上せ候様ニと被申渡候条、拙僧申候ハ、其段ハ具ニ可申達候。併、愚推仕候ニ、日吉役料ハ僅之事候へハ、被仰付候而も、太夫ハ江戸ニ罷有、御神事も名代斗ニ而相勤申様ニ可有御座候。左候へハ山門衆中難儀ニ可存候。左様御心得可被下候。其上、此権大夫ハ先頼母と兄弟之事候。頼母ハ先御門主様ニ不儀之免候処、今亦其兄弟ニ可被仰付事いか、候哉と申入候。

右の記事から、この日吉権大夫が水戸徳川家出入りの役者であり、日頃は江戸に居住していたこと、また先に日吉社から追放された日吉頼母（権大夫）の弟であったことなどが知られる。しかし、水戸徳川家の口聞きがあつたにもかかわらず、日吉権大夫の願ひは退けられ、その後、権大夫が日吉社神事に参勤する機会はなかつた。

ここで注目されるのは、日吉頼母（権大夫）の弟もまた日吉権大夫を名乗っていることである。実際、貞享から元禄期にかけて、日吉権大夫を名乗る能大夫が諸記録に散見する。例えば、大和宇陀の松山藩の日記『御用部屋日記』（柏原町歴史民俗資料館蔵）貞享四年五月二十六日条には、同年の五月十六日に江戸藩邸で秋月式部躰入の祝儀に囃子が催された由が見え、「役者日吉権大夫と申者参、仕舞申候」とあるほか、また貞享五年五月十一日付の『起請文』（大倉源次郎氏蔵）にも、大蔵求馬・金春八左衛門・大倉六蔵ら十四名の能役者とともに、「日吉権大夫」

の名前が見え、江戸城の奥能に出演するにあたって、「奥向ニ而及見聞候儀、一切他言仕間敷事」などを誓約しているのである。とりわけ後者の記録からは、日吉権大夫が江戸城奥能に出演できるような立場にあった役者であったことが窺えるが、あるいは当時、権大夫は宝生座か観世座かの座衆に名前を連ねていた可能性もあろう。これらの記録に見える日吉権大夫は、いずれも江戸での活動を伝えるものである。先の頼母弟の日吉権大夫もまた江戸に居住していたことを考え合わせると、両者が同人である蓋然性はかなり高いだろう。とすると、先に見た日吉頼母（権大夫）と同姓同名の日吉権大夫が、実は頼母の実弟だった可能性も出てくるが、兄の頼母（権大夫）がおもに上方で活動し、弟の権大夫が江戸を主要な活動の場としていたために、兄弟が同時期に同名を名乗っていたことも十分ありえるのではなからうか。

日吉権大夫については、宝永（一七〇四―一）頃の成立とされる『四座先祖書』（大倉三忠氏蔵）に、「紀伊大納言様御太夫 日吉正説」に続けて、「保科筑前守殿太夫 宝生将監弟子 同権太夫」と見える。日吉松雪と並べて記載があることから、この日吉権大夫は日吉松雪の子供であったかと推察されるが、後述のように、権大夫の生年は寛永十四年（一六三七）であり、これは日吉松雪の壮年期にあたっていているから、松雪と権大夫が親子であった可能性は十分にある。また、日吉権大夫が宝生大夫の弟子になっていたことも、『四座先祖書』の「宝生将監弟子」という注記から知られる。権大夫が宝生将監重友（貞享二年没）の弟子であり、しかも重友からかなり厚い信頼を得ていた事は、法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵の『正徳日吉宝生流仕舞秘伝』（以下、「仕舞秘伝」と略す）の記事からも窺うことが出来る。同書は、日吉弥右衛門氏春（権大夫の子）が伊勢山田の御師久保倉に相伝した能伝書で、能の秘事や《翁》《関寺小町》《石橋》などの秘曲の型付を記したものであるが、片桐登氏の前掲論文で、

「記事中の随所に、日吉姓の役者名―日吉松雪・権大夫・氏喬・氏春―が記されていて、その具体的な活動を、一部ではあるが、把握することもできるし、当時の日吉が宝生流系であつたらしいことも分るなど、日吉一座の研究には有益な書物である」と紹介される書物である。同書には、享保（一七一六―三六）頃、日吉弥四郎氏秦なる人物の手になると思しい貼紙が多く見られ、その《関寺小町》の貼紙に、日吉権大夫にかかわる次のような記事が見える。

一、此関寺、巖有院殿公ノ御時、宝生將監重友ニ此能被為仰付候処、重友、日吉権太夫ト相談被致、此関寺、首尾能被動候悦ニ、重友ガ権太夫方^江

いつその比、関寺小町の能を大やけの御仰事にて仕らさせ給ふへきよし有しかは

百年のむかしを今に返す袖千代をへぬへきかさし成けり

ケ様ニ相認、権太夫方^江被贈候。今ニ日吉氏喬方ニ有之。右、関寺小町ノ能ハ、詞ニモ芸ニモ筆ニモ及難し。菟角、平生ノ芸ノ心掛專ナリ。

徳川綱吉の命をうけた宝生大夫重友は、日吉権大夫の助言を得て、首尾よく《関寺小町》を勤めることが出来た祝いに、右の詠草を権大夫に贈つたという。権大夫と重友とが日頃から親しく交流していたことを窺わせるが、宝生大夫重友が芸の面で日吉権大夫から学んだ点も少なくなかつたらしく、『隣忠見聞集』の「日吉弥右衛門」の項にも、「宝生には習事数無きを、此日吉弟子になり、習事其外遠き能も宝生に出来しと聞しなり」とあつて、宝生座の習事やレパートリーの拡張に、日吉が大きな役割を果たしていたことを伝えている。

さて、その日吉権大夫の具体的な演能活動であるが、上方での権大夫の活動記録は、現在のところ、元禄九年四月の大坂高原での大蔵長大夫主催の勸進能だけしか見出せない。しかし、大坂での勸進能という、いわば暗れ舞台に出演していることから、権大夫が上方において相当に活躍していたことが窺われ、また、この大坂勸進能で、権大夫は《道成寺》《姨捨》《乱》といった秘曲を演じており、彼の実力者ぶりを伝えている。ここで権大夫が演じた《姨捨》については、『仕舞秘伝』の《姨捨》にかかわる貼紙に、「此姨捨、元禄九歳子四月、日吉権大夫、大蔵長大夫、大坂於高原、一代能ノ節、四日目ニ勤ル。(中略)権大夫ハ六十五歳ニテ此姨捨ヲ始テ御勤」とあり、ここから、当時、日吉権大夫が六十五才だったことが知られ、逆算して権大夫が寛永十四年の生まれであったことも判明する。日吉権大夫の活動記録が見られる貞享・元禄期、権大夫はすでに五十代から六十代にさしかかったこととなるが、元禄七年、彼は新たに津軽藩お抱え役者の地位を得て、能大夫としてなお一線で活躍を続けた。大倉三忠氏蔵『四座先祖書』には「保科筑前守殿大夫」とあるから、保科家(会津若松藩か)に召し抱えられていた時期もかなり長かったかと推察されるが、その詳細は不明で、おそらく保科家を御暇になった後、あるいは水戸徳川家などに出入りした時期をはさんで、その後、津軽藩に召し抱えられるにいたったものであろう。

その津軽藩での日吉権大夫の動向は、弘前市立図書館蔵『弘前藩庁日記』により、具体的に窺うことが出来る。同書によれば、日吉権大夫が津軽藩に召し抱えられて、弘前にはじめて下つたのは、元禄七年九月十四日のことであり、『弘前藩庁日記』同日条に「御能役者日吉権大夫・同定右衛門・奥田庄左衛門・村井文右衛門・林吉兵衛・同兵九郎、今日申刻到着。町宿申付之」と見えている。日吉権大夫とともに名前が見える日吉定右衛門も、やはり丹波日吉の能大夫と思しく、元禄九年の大坂勸進能や元禄十・十二年の京都勸進能で、日吉権大夫・弥右衛門と

もに大夫を勤めている「日吉貞右衛門」と同人であろう。

同年の十一月九日から二十二日にかけて、弘前城では、五日間に及ぶ津軽信政下着祝儀能が盛大に催された。連日、五番立ての能が演じられ、日吉権大夫と日吉定右衛門の二人が大夫を勤めている。二人は、その年の暮れを津軽で過ごし、十二月二十三日の年忘祝儀能、翌元禄八年正月十二日の年始祝儀能、正月十八日の津軽信政五十賀祝儀能などの御用を勤めた後、三月になって、江戸に上つている。

その後も、日吉権大夫は、津軽藩において精力的な活動を続けた。大正七年に永沢得右衛門により編纂された『津軽史』（昭和五十年。青森県文化財保護協会刊）によると、日吉権大夫は弘前の門弟の一人秋元蔵主潔克に三老女まで相伝した由であり、権大夫が津軽藩の能楽の充実に物心ともに尽力した様子が窺える。そうした津軽藩における権大夫の活動は、彼が亡くなるまで続いたと考えられ、その後、日吉大夫と津軽藩との関わりは、権大夫の次の世代に受け継がれていくのである。

「日吉弥右衛門氏春（武居斎宮）」

日吉権大夫の子が日吉弥右衛門氏春である（『仕舞秘伝』〈姨捨〉貼紙）。氏春は、『仕舞秘伝』の奥書に、「近江坂本日吉山王楽頭秦川勝ヨリ卅三代日吉弥右衛門事／武居斎宮氏春」と署名しており、「武居斎宮」とも名乗っていたことが知られる。同書の《石橋》型付の貼紙に、「石橋作物仕様、（中略）右之三ツ臺ハ、於大坂曾根、日吉氏春、六十歳ニテ、享保四歳亥四月十六日ニ御勤候絵図也」とあるのによれば、弥右衛門氏春は万治三年（一六六〇）の生まれ。その活動記録は元禄頃から散見し、元禄九年四月には、大坂高原での勧進能に父権大夫とともに出演した

ほか、元禄十年四月に京都丸山下、元禄十二年六月にも同所で「日吉弥右衛門勸進能」を行っている（『古今稀能集』）。かつての日吉空庵がそうであったように、元禄期、日吉は再び頻繁に勸進能を興行しているのである。右の『仕舞秘伝』貼紙に見える享保四年の大坂曾根崎での《石橋》も勸進能として演じられたものであり、『古今稀能集』には「享保（享保）二亥年四月、大坂曾根崎ニテ勸進能」と見えている。

こうした上方での勸進能が弥右衛門氏春の主要な活動の場であったことは疑いないが、その一方で、父の日吉權大夫の後をうけて、氏春は武家とも密接な繋がりを保っていた。大和宇陀松山藩『御用部屋日記』元禄二年正月二十日条に、山田甚右衛門・松本平八とともに、「日吉弥右衛門（但權大夫勤）」が江戸藩邸に罷出て謡を謡った由が見えるし、また、津軽藩にも出入りし、氏春自身の筆になる『仕舞秘伝』には、「右、津軽御屋形江書付上候ナリ」といった注記も見られる。しかし、元禄末年頃、氏春は津軽藩を御暇になつたらしく（後述）、その後の弥右衛門氏春はもっぱら上方での演能活動に従事していたものと考えられ、元禄期の京都の能大夫について記した『京羽二重』『元禄覚書』にも、氏春のことと考えられる「日吉弥右衛門」の名前が見えている。

弥右衛門氏春は、かつて丹波日吉が参勤していた近江日吉社の神事能にも姿を見せている。延暦寺別当代の日記『延暦寺山麓日次雜記』によると、元禄十六年正月六日、「日吉弥右衛門」が日吉社神事能に参勤して、《翁》以下、能五番を勤め、その年の七月五日には、「山王能太夫之事、日吉弥右衛門と申者、十一代日吉之大夫相続相勤申候由緒も有之候間、太夫被仰付被下候様ニ」と願ひ出ているのである。ここで注目されるのは、日吉弥右衛門家が十一代にわたって、日吉社の神事能を勤めていたとあることである。もしそうだとすると、丹波日吉の近江日吉社への参勤が室町初期にまで遡る可能性もあるが、後述のごとくこれは信じ難い。丹波日吉と日吉社との関わりの深さ

をことさら強調したための伝承としてよいだろう。

この日吉弥右衛門氏春の願いは一旦は退けられているが、氏春はその後もしばしば坂本を訪れており、元禄十六年の十二月四日に「日吉弥右衛門、来迎寺舜悦同道ニ而花王院ニ而対面」、十二月十五日に「日吉弥右衛門、伊勢ノ帰り候由ニ而、昨夜、行光房へ来り、何も対面申候也。昨日、こうらいせんへい持参、礼ニ参候由也」（いずれも『延曆寺山麓日次雑記』）、また、宝永二年（一七〇五）四月十五日にも、「能太夫日吉弥右衛門、見舞ニ来」（『延曆寺日次記』）などに見える。そうした地道な売り込みが功を奏して、正徳二年（一七一二）正月六日に日吉社神事能に参勤（『延曆寺日次記』同日条「今日、神事能首尾能相済。大夫日吉斎宮」、そして、翌年の正徳三年正月五日には、年来の大望かなって、氏春は日吉社の神事能大夫に就いており、『延曆寺日次記』同日条に、「日吉弥右衛門義、由緒有之ニ付、日吉能大夫ニ相極申候との義」とある。

叡山文庫には、氏春が大夫職を願い出た折りに、延曆寺に提出したと推察される系図が所蔵されている。包紙に「日吉斎宮系図」とあり、中の一紙には「系図」と冒頭に書かれた後に、「日吉勘大夫氏房・日吉万五郎氏マツ・日吉五郎右衛門氏曹・日吉四郎兵衛氏重・日吉五郎右衛門氏高・日吉四郎兵衛氏次・日吉弥右衛門氏祐・日吉四郎兵衛氏景・日吉権頭氏国 空菴与申候・日吉弥右衛門氏種 松雪与申候・日吉弥右衛門氏房 日教与申候・日吉斎宮氏春・日吉弥右衛門氏喬」と、丹波日吉の歴代の名前が列記されている。日吉斎宮氏春以前に十一人の名前が挙がっており、先の「十一代日吉之大夫相統」という記事と対応するが、日吉権頭空庵以前の歴代は、五郎右衛門と四郎兵衛の名を適当に並べただけの感もあり、あくまで正徳期における伝承として見るべきであろう。また空庵以後についても、松雪の諱を氏種とすること（先述の自筆謄本では「将氏」）、氏春の父権大夫の名が見えないこと（ある

いは、日吉弥右衛門氏房が権大夫と同人か）など、いささか問題もあるが、丹波日吉に関する同様の系図資料が全く知られていない中で、この系図は貴重な資料である。とくに、狂言方の大藏・鷲・和泉の系図が、ともに遠祖の一人として名前を挙げる日吉万五郎が、この丹波日吉の系図にも見られることが注目される。さらに、大藏虎明の『わらんべ草』にも、「日吉弥右衛門 予家ノ先祖、少ノ間觀世ニアリ」と、觀世座の狂言師日吉弥右衛門が狂言大藏家の先祖に挙げられているが、この觀世座の狂言師日吉弥右衛門こそ、日吉空庵の父であったし（『四座役者目録』）、大藏虎明の『わらんべ草』が「わきくにて、後々も作りたる狂言」として、春日社禰宜の狂言・歌舞伎の狂言とともに、「丹波の者」の狂言を挙げているなど、丹波日吉は狂言史においても、かなり重要な役割を担っていたらしい。

それはともかく、正徳三年正月、日吉社神事能の大夫となった日吉氏春は、その正月六日に行われた日吉社神事能には出演せず、『延暦寺日次記』同日条に、「能大夫日吉齋宮、江戸々未参着不申候故、名代二川勝安之丞相勤之」とあるように、京の能大夫川勝安之丞に名代を勤めさせている。それどころか、この後、氏春は一度も日吉社神事能に参勤することがなかった。その理由は明らかでないが、たまたま他の地での演能活動と重なるなどして、参勤の機会がなかったたのであろう。

『延暦寺日次記』の右の記事によると、氏春が正徳三年の神事能に参勤しなかったのは、「江戸々未参着不申」ためだったが、実は氏春はこの時、伊勢にいたらしい。江戸から上方への帰路の途中、伊勢に立ち寄り、その地でしばらく滞在していたものと見られる。すなわち、『延暦寺日次記』正徳三年正月二十八日条に「野村齋宮（ついで）おち来（ついで）テ云、齋宮義、勢州ニ罷在候。御礼旁々参上仕管ニ御座候処、足をくじかし罷在候故、不罷出之義、背本意申候」

云々と見えるのである。この「野村齋宮」は、かつて日吉社の神事能の大夫を勤めていたのが野村姓の役者だったことによる混同で、日吉齋宮のことを指していると考えられるが、右の記事によると、日吉齋宮氏春は滞在地の伊勢で足をくじいたため、日吉社に参上することができなかつたという。ここに伊勢の地名が登場するのは注目される。それは、氏春の手になる「仕舞秘伝」が、この年の九月、ほかならぬ伊勢の御師久保倉に相伝されているからであるが、氏春はこれ以前にも何度か伊勢を訪れていたようで、『延暦寺山麓雜記』元禄十六年十二月十五日条に「日吉弥右衛門、伊勢を帰り」などと見えている。

丹波日吉と伊勢との繋がりには氏春以前に溯るらしい。江戸中期、伊勢にかかわる様々な故事を書き留めた『昔物語』（『宇治山田市史』所引）に、「靈巖寺ノ後ノ小橋ト云フ所ニテ、堀切町ノ鍛冶屋ニ狂言師ノ足兵衛ト云フ者ノ興行シタル勸進能ノ時ニ、古法本式アリト云フ。能大夫ハ日吉権大夫ナリキ」云々とあり、元禄以前のこととして、日吉権大夫が伊勢で勸進能を興行した由が見えるのである。この勸進能の正確な年時が不明なため、大夫を勤めた日吉権大夫が、氏春の父の権大夫なのか、日吉頼母（権大夫）なのか明らかでないもの、おそらく当時すでに丹波日吉は伊勢に活動の地盤を持っていたものと思われるのである。

〔日吉弥右衛門氏番〕

ところで、日吉弥右衛門（齋宮）氏春と同時期に、実はもう一人、日吉弥右衛門を名乗る能大夫がいたらしい。そのことは、『弘前藩庁日記』宝永四年二月十六日条の、次の記事から知られる。

日吉弥三郎、書付二而、藤岡五兵衛を以申立候者、私儀、当年廿二歳ニ罷成候。前髪執申候様奉願候。且また名替之儀、弥右衛門与申名、代々家名ニ而御座候間、弥右衛門与改申度奉願旨。同名弥右衛門、俄牢人者之儀ニ御座候付、家名私ニ名乗せ申度念願ニ御座候由、申立候付、鞆負江相達候處、前髪取、名茂改候様ニ可申付由、被申候付、則其段、五兵衛ニ直ニ申渡之。

右の記事によれば、日吉弥三郎なる人物が、代々の家名である弥右衛門の襲名を願ひ出ており、その願ひ通り、弥三郎は「前髪取、名茂改候様ニ」仰せ付けられている。この日吉弥三郎は津輕藩お抱えの能大夫であつた。『弘前藩庁日記』の宝永年間の演能記録にその名が見え、右の願ひが出された宝永四年以後は日吉弥右衛門の名で記録に頻出する。宝永四年当時、二十二歳であつたというから、先の日吉弥右衛門氏春（宝永四年には四十八歳）と別人であることは言うまでもない。右の記事中に、「同名弥右衛門、俄牢人者之儀ニ御座候付、家名私ニ名乗せ申度念願ニ御座候」とあることから、日吉弥三郎以前に、日吉弥右衛門なる役者が津輕藩に召し抱えられており、後に御暇になつていたことが知られるが、おそらくここにいう「同名弥右衛門」が、日吉弥右衛門（齋宮）氏春のことを指しているよう。その氏春の後を受けて津輕藩の能大夫を勤めていたのが日吉弥三郎だつたわけで、日吉弥右衛門氏春がすでに津輕藩を召し放たれていたので、日吉弥三郎は弥右衛門の家名相続を津輕藩から許され、ここに二人の日吉弥右衛門が誕生することになるのである。氏春の主要な活動の場は上方であり、一方の日吉弥右衛門（弥三郎）は津輕と江戸での活動が主であつたらしいが、日吉弥右衛門氏春が、しばしば武居齋宮の別名を名乗つていたのは、あるいは津輕藩お抱えの日吉弥右衛門に遠慮したためではなかつたらうか。「齋宮」という氏春の名

乗りが記録に見られるのは、いずれも宝永四年以降なのである。

一方の津輕藩お抱え能大夫の日吉弥右衛門であるが、代々の家名が弥右衛門であること、幼名が弥三郎であること（日吉空庵の幼名も弥三郎であった）などから、氏春と同じく丹波日吉の能大夫であったことは疑問の余地がない。正徳頃のものと思われる先述の『日吉斎宮系図』には、日吉斎宮氏春の次代として「日吉弥右衛門氏喬」の名前が挙がっているが、年代的に見て、この日吉弥右衛門氏喬が津輕藩お抱えの日吉弥右衛門と同人である可能性がきわめて高いだろう。正徳三年の『仕舞秘伝』の型付には、「氏春ヨリ氏喬江ノ仕舞附」といった注記が散見し、氏喬が氏春の指導を受けていたことが解るが、津輕藩能大夫日吉弥右衛門が日吉氏春より二十六才下である点も、氏喬を津輕藩の日吉弥右衛門に比定する有力な傍証となる。

その日吉弥右衛門氏喬と氏春との関係は、二十六才という年齢差から見ても、親子とするのが自然だと思われる。ただし、先述の『津輕史』「日吉弥右衛門」の項には、依拠資料名は不明ながら、「日吉権太夫倅弥右衛門と言ふ名に追ふ上手にて業と言ふ、謡は弱き如にして強く、呂律章句顕然と舞台の掛見事さ、父にも不劣者也と能方に心の入たる老人の物語也。（中略）弥三郎弥右衛門幼名には父か業を修行の時、親権太夫、渠が帯の間へ左右の大指差入置、はまりを教え、然して謡せ、少も指に緩みが付と其手にて拳打にせられしと言たる由也」などあって、津輕藩能大夫日吉弥右衛門（弥三郎）を日吉権太夫の子供としている。日吉弥右衛門は貞享三年（一六八六）の生まれであり、日吉権太夫は元禄十年代まで健在であったから、右のごとく、弥右衛門が権太夫の子供である可能性も十分あり、その場合には日吉斎宮氏春と日吉弥右衛門氏喬とは年の離れた兄弟であったことになる。なお、天野文雄氏『翁猿楽研究』によれば、宝永二年に吉田家の『翁の大事』を相伝されている「日吉弥右衛門倅喬□」なる人物が

いる（『翁大事相伝人数書』）。この「日吉弥右衛門忞喬□」と氏喬との関係も今のところはつきりしない。いずれにせよ、氏春と氏喬とが同時期に日吉弥右衛門を名乗っていたのは、氏春が京都で日吉大夫として活動する一方で、氏喬もまた津軽藩にあって日吉大夫の当主として活動するという、二人の当主が並立する状況にあったためであるらしい。

津軽藩における日吉弥右衛門氏喬の演能活動は、享保五年十一月二十一日の弘前城での御慰能、享保十三年正月二十一日の御賀御祝儀能など、享保年間に入っても頻繁に見られる。しかし、氏喬の次代になって、日吉は津軽藩を召し放たれたようである。先述の『津軽史』には、「弥右衛門子園次郎と言、宝曆の頃か、御暇出、宝生将監方ニ罷有、後松平大和守様へ御奉公の由」とあり（『津軽史』の別の箇所では、氏春の子の名を慶次郎とし、御暇の時期を元文頃とする）、弥右衛門（氏喬）の子日吉園次郎の代になって津軽藩を御暇になり、一時、宝生将監のもとに身を寄せた後、松平大和守（前橋藩か）に召し抱えられた由を伝える。松平大和守お抱え後の動向については未調査のため明らかでないが、幕末の弘化五年（一八四八）、宝生大夫が江戸で主催した勸進能にも、藤本孔雀大夫ら、宝生弟子の能大夫とともに、日吉友太郎といった日吉姓の能大夫の名前が見え、江戸後期になお日吉大夫の末裔が宝生大夫の傘下において演能活動を続けていたことを物語っている。

おわりに

以上、丹波猿楽の流れを汲む日吉大夫の動向を、江戸初期から中期にかけて、通史的に辿ってきた。大和猿楽に劣らぬ歴史を持つ丹波日吉大夫は、江戸中期、日吉権大夫・弥右衛門氏春・弥右衛門氏喬の三代にわたって、京・

大坂での勸進能、日吉社神事能、伊勢の御師との交流、そして津輕藩における演能活動と、実に幅広い演能活動を繰り広げるなど、近世能楽史において見過ごすことの出来ない存在であった。宝生流の傘下に入ったものの、宝生大夫からも一目置かれる、弟子の筆頭的位置にあり、しかも、なお日吉独自の演出をも持ち伝えていた。「仕舞秘伝」が載せる九曲の型付は、基本的に宝生流の演出に拠っているものの、日吉権大夫が元禄九年に演じた《姨捨》のシテの立ちについて、「此出立、白長絹二紅大口、後、出羽ヲ杖ニテ、クセ舞ハ扇ニテ御勤」と記し、「右ノ出立ヲ日吉ノ出立卜定」とあるなど、日吉を一流とする意識が垣間見られるが、事実、江戸中期の日吉大夫はそれに見合うだけの活躍をしていたのである。

その日吉大夫は江戸後期になって次第に衰えていき、かつての華やかな活躍も見られなくなる。同じ丹波猿楽の梅若が、観世座ツレの地位にとどまったため、その芸系を現代まで伝えているのに対し、早々に観世座から離脱し、能大夫として活動する道を選んだ日吉大夫は、元和・寛永期と貞享・元禄期に一時華やいだものの、江戸中期以降は概して低調な活動に終始し、維新後に絶えてしまったようである。その日吉大夫の系譜や歴代の事跡は、これまで述べてきたところで、ある程度輪郭が明らかになったかと思うが、日吉の演出が宝生流の演出に影響を及ぼした具体事例や、江戸後期の日吉大夫の動向など、さらに究明すべき問題はなお数多く残されている。それらについては後考に期することにした。

付記 資料の閲覧にあたり、格別の便宜をはかって下さった叡山文庫や弘前市立図書館、法政大学能楽研究所、柏原町歴史民俗資料館に末筆ながら厚く御礼申し上げます。

(大学院後期課程学生)